

対馬の闇Ⅱ

懺悔

春日信彦

うわさ

ひろ子は、誰にも言わないようにと念を押されて、“内部犯行かも”と沢富から耳打ちされて以来、毎日、水死体で発見された出口巡査長のことが頭から離れなかった。もし、警察内部の犯行であれば、表向きには殺害の可能性を考えて捜査するだろうが、最終的には事故死で処理されるのは目に見えていた。このままでは、出口君は浮かばれない。なぜ、殺害されたかまでは突き止めることができなくとも、殺害されたと思われる手掛かりだけでもつかみたかった。几帳面な出口君であれば、きっと、日記をつけていたはず。日記帳に書いていたなら、すでに犯人に没収されているだろう。パソコンに日記を保存していたのであれば、すでに、犯人が抹消しているに違いない。危険を感じた出口君が、万が一のことを考えてUSBメモリーに日記を保存し、どこかに保管していたのかもしれない。その可能性のほうが高いように思えてきた。

犯人もその可能性を考えて、部屋は隅から隅まで探索したに違いない。警察のやり方を知っている出口君は、そのようなことは当然予想して、部屋には隠していないはず。でも、隠すといっても誰かに知らせなければ意味がないから、信頼できる誰かが発見できる場所に隠したのか？万が一があった場合、日記を読んでもくれるように頼んで、信頼できる人に手渡したのか？出口君のことだから、何か手掛かりを残しているはず。出口君に彼女はいたのだろうか？身内といえば、母親と妹がいたはず。でも、すでに犯人は彼女らにも接近しているかもしれない。そのことも想定して、USBは彼女らには手渡していないような気がしてきた。信頼できる人といえば、だれか？同じ警察官か？それとも友達か？3年前のクラス同窓会で巡査長に昇進できたことを数人の仲間たちで祝福した。その時の仲間の誰かなのか？

出口君は上司の不正を知ったから殺害されたに違いない。となれば、出口君を調査していることが犯人に知られたならば、自分も殺害されることになる。ひろ子は、だんだん怖くなってきた。でも、このまま出口君を犬死させたくなかった。きっと、どこかに手掛かりがあるはず。ひろ子は、神に祈った。“神様、出口君の無念を晴らしてください。私に力を貸してください。私を守ってください。どうか、手掛かりを発見させてください。”静かに祈っているとチャットちゃんの軽やかな声が響いた。“福岡空港国内線ターミナルに到着しました。”ひろ子は、ハッとしました。お客のことをすっかり忘れていた。

お客が降りるとまたもやひろ子は考え込んだ。出口君はUSBに上司の不正を書き残したように思っ
てはみたが、そうではないかもしれない。ほかにどんな方法があるか？誰かに手紙で知らせた
のか？あ、愛読書のページの間に秘密のメモを隠し、誰かに手渡したのかも？要は、だれに不正
を知らせるのが最も効果的か？身内や友達に知らせても彼らが危険にさらされるだけだし、か
とって、警察官に知らせても握りつぶされるだけ。こう考えていくと誰にも知らせる人がい
なくなる。警察の悪行ということは、国家の悪行ということ。そうか、もしかしたら、国家の悪
行を、世間に知らせるために、世間の関心を引くために、自殺したのかもしれない。出口君が上
司の不正にかかわっていたのなら、自分を罰するための自殺の可能性は高い。でも、遺書はな
かったみたいだし。いや、もしかしたら、遺書を誰かに郵送しているのかもしれない。でも、い
った誰に？

ふと気づくとAIタクシーは空港のタクシー乗り場で御客待ちをしていた。ひろ子は、ちょ
っとチャットちゃんに質問してみたくなった。「ね～、チャットちゃん、ちょっと聞きたいこと
があるんだけど？」チャットちゃんは元気よく返事した。「はい、何なりとおっしゃってくだ
さい。ご主人様」あまりにも漠然とした質問だから、質問しづらかったが、事故死か？殺害か？に
ついての質問を始めた。「あのね～、対馬の友達が最近亡くなったのよ。そのことが気になっ
て、夜も寝れなくて困ってるの。そこでなんだけど、友達は事故で亡くなったのか？殺害され
たのか？どちらだと思う？」チャットちゃんは、すでに対馬の事件についての情報を仲間の
イツコー君から入手していた。「ちょっと、チャットはAIなのよ。ちゃんとした情報をイン
プットしてから、質問してよ」

ひろ子はしかめっ面で返事した。「それがね～～。まったく情報がないのよ。チャット
ちゃんだったら、何かいい情報を手に入れてるんじゃないかな～～と
思って、聞いてみたの」チャットちゃんは、返事した。「まあ、ないこともないけど、でも、
がっかりする回答かも。それでもよければ、答えます」ひろ子は、即座に返事した。「なん
でもいいのよ。わかったことを教えて」チャットちゃんは、一呼吸おいて返事した。「警視
庁のAIイツコー君の情報によると出口巡査長は事故死、もしくは自殺ということで処理され
ています。殺害の可能性はないとのことです」ひろ子は、やっぱり事故死として処理され
たかのがっかりした。「ありがとう。思った通りだった」

チャットちゃんは、話を続けた。「ご主人様、何か他に情報はないのですか？情報さえあれば、チャットが推論してあげます。どんな情報でもいいからインプットしてください」ひろ子は、うなずき返事した。「そうよね。とにかく出口君に関する情報を集めなくちゃ。わかったわ。ちょっと、休暇を取って出口君の情報を集めてくる。それまでちょっと待ってて」チャットちゃんは、即座に返事した。「はい、お待ちしております。ご主人様」そうは言ってみたもののどうやって情報を入手すればいいか迷ってしまった。警察官に聞いたりしたら、即座に出口君の調査のことが知られてしまう。では、いったい誰に聞けばいいか？友達か？彼女か？友達といっても漠然としてるし、彼女がいたとしてもだれかわからないし。

くよくよしても始まらない。とにかく実行しようと決めた。まずは、クラスメイトであり、高校の時ソフトテニス部でペアを組んでいた美船さゆりに当たってみることにした。幸いにも彼女の父親は上対馬鰐浦で民宿を経営していた。そこに二泊して聞き込みを開始することにした。比田勝港からだと30分ぐらいだから、ビートルに乗って、到着したら港の近くのバジェットでレンタカーを借りて民宿みふねに向かうことにした。幸い、12月10日（月）が非番だったことから火、水の休暇を申請することにした。民宿は午後1時から午後3時ごろまでは若干暇と聞いていたので、早速、さゆりに電話した。2回発信音が鳴るとさゆりの明るい声が跳ね上がってきた。「は～～い、さゆり。今頃、何？」早速、予約の話をした。「宿泊の予約をしようと思って。12月10日月曜と12月11日火曜日、予約できる？」

さゆりは即座に確認した。「二人なの？」ひろ子も即座に返事した。「いや、一人。できる？」てっきり彼氏と二人だと思ったさゆりは、意外な感じで返事した。「いいけど、一人って、どういうこと。実家とうまくってないの？」ひろ子は、簡単に事情を話した。「そうじゃないの。さゆりと話がしたいの。ほら、クラスメイトの出口君がなくなったじゃない。そいで、出口君についてちょっと聞きたいのよ」さゆりも出口君については納得がいかなかった。「わかった。10日と11日ね。予約OK. 何時ごろチェックインする？」ひろ子はビートルを使うことを話した。「ビートルで行くから、まあ、午後4時ごろになると思う。いい？」さゆりは明るい声で返事した。「わかった。ちょうど、話し相手が欲しかったところ。楽しみにしてるわ」

ドアの開く音がした。チャットちゃんのかわいい挨拶の音が響いた。「ようこそ、AIタクシーをご利用くださり、ありがとうございます」ティーンエイジャーと思われる二人の少女が乗り込んできた。ひろ子も笑顔で挨拶した。「こんにちは。どちらまで？」ブルーヘアの少女が甲高い声で答えた。「ドーム、あ、マークイズまでお願いします」チャットちゃんは、即座に返事した。「かしこまりました」AIタクシーは高速に乗りあがると百道ランプに向かった。ブルーヘアが能天気な声で話し始めた。「マークイズいかれました～？あたしたち～、2回目。4階にシネマ、2階にゼップ。最高です。ドームへも2階からいけるんですよ。そう、いずれHKTも隣に戻って来みたい。あ～～待ち遠しいな～～」まだ行ってないひろ子は、うなずきながら笑顔を作った。

隣のオレンジヘアが、足を組み替えながら話し始めた。「話は違うんだけど、あのさ～～、ほら、ニュースでやってた、自殺したっていう対馬の警官ね、高校の先輩なのよ。まったく、いい迷惑」ブルーヘアが返事した。「そういや、みゆきは、対馬だったね」オレンジヘアが小さな声で返事した。「そう、小さな島でしょ。変なうわさが広まって。母校の恥さらし。まったく。死にたかったら、車ごと、崖から墜落すればよかったのよ。だったら、交通事故ってことになったのに。マジ、クソヤロ～」ブルーヘアが首を左右に振りボキボキと音を鳴らして返事した。「そういいなよ。マジ、悩んでいたんじゃない。でも、孤島のド田舎でも、悩むような事件ってあるんだね」オレンジヘアが顔をゆがめて返事した。「盗撮が、上司に見つかって、クビ～～って言われたのよ。ショックで、投身自殺、そんなとこじゃない」顔を見合わせた二人は、鼻でクスクス笑った。

こっそり聞いていたひろ子は、チョ～ムカついていて、顔は、真っ赤になっていた。一発、パンチを食らわせてやろうかとかぶしを作ったが、母校の後輩たちにとっては、いい迷惑に違いない。つくづく、先輩として情けなくなった。このままだと、出口君は、自殺の汚名を着せられ、対馬の恥さらしにされてしまう。出口君の名誉を挽回するには、自殺ではないことをはっきりさせなければならない。それには、殺害した犯人を検挙する以外にない。一人悶々としていると、チャットちゃんのアナウンスが流れた。「今日は、ご乗車、ありがとうございました。マークイズに到着いたしました。お気をつけて、行ってらっしゃいませ」ドアが開くと二人は立ち上がった。オレンジヘアがひろ子に声をかけた。「顔が赤いですよ、カゼじゃないですか？お大事に」ひろ子は、後輩に同情されて、しょんぼりした顔で言葉を返した。「ありがとうございました。また、ご利用くださいませ」

親友

12月10日（月）博多港13時20分発のビートルに乗り込んだひろ子は、15時30分に比田勝港国際ターミナルに到着した。ひろ子は、バジェットに予約していたレンタカーのスズキ・ソリオに乗り込むと北西に位置する民宿みふねに向かった。道がすいていたためちょっとだけとぼした結果、民宿には午後4時前に到着した。4時前10分から玄関前で待機していたさゆりが笑顔で出迎えた。「いらっしやい、ひろ子」さゆりはひろ子を思いっきりギュッと抱きしめた。荷物を手にしたさゆりは2階の部屋に案内した。「最高に眺めがいい部屋をとっといたから」ひろ子は、少し急こう配の階段を上がっていった。部屋に入ると西向きの窓には、対馬海峡西水道を越えて霞のかかったプサン港の影がぼんやりと浮いていた。「急に無理言って、ごめんね。どうしても会いたかったの」さゆりは小さく顔を左右に振った。「全然。私も会いたかったのよ。夕食は、6時から、1階の食堂。お風呂も1階。8時過ぎたら、暇になるから上がってくる」

食事と入浴を済ませたひろ子は、西側の窓からふんわりと輝くプサン港を眺めながら、さゆりへの質問を考えていた。しかし、これといった糸口となる質問が思い浮かばなかった。ただ、出口君が自分たちと同じクリスチャンであることから、さゆりに何か言い残してはいないかというかすかな期待があった。8時15分を過ぎると階段を駆け上がってくる足音が響いてきた。ドアが開くとさゆり叫んだ。「ごめん、遅れちゃって、ちょっと、離れに行ってたから。お母ちゃんが、娘を面倒見てくれてるの。今日は、友達が来てるから、一寸遅くなるって、言ってきたのよ」3年前の同窓会の時、大きなお腹をさすりながら、やっと子供ができたと言っていたさゆりの妊婦姿を思い出した。「あ～女の子だったの。ってことは、3歳になるのよね」さゆりは笑顔で答えた。「そう、3歳のおてんば娘。お茶以外、何か飲みたいものある？」

お酒を飲みたい気分ではなかったひろ子は、コーヒーをお願いした。「コーヒーが飲みたい。キリマンがいいな」さゆりは1階に降りて行った。しばらくするとコーヒーポット片手に、トレイに乗せたコーヒーカップ2つを運んできた。「はい、キリマン」ポットからカップに注ぎ、ひろ子の前に差し出した。目を細めて香りをかいだひろ子は、笑顔ですすった。「さゆりもキリマン飲むの？」さゆりはかぶりを振った。「主人が飲むのよ。私は、モカ。でも、最近は、キリマンの酸味がおいしく感じるの。そう、彼氏、いるんでしょ？」ひろ子は、沢富のことは話したくなかった。というのは、沢富が刑事であることを話したくなかったからだ。「まあ、いることにはいるんだけど、結婚相手かどうか？それより、民宿は、ご主人がやってるの？」

さゆりはうなずいた。「父と主人。主人は、板前だったでしょ。だから、料理の評判は結構いいの。父は、すごく喜んでいるみたい。でも、付き合ってた時と比べたら、なんだかね～～」結婚すると男は変わるというけど、やっぱ、さゆりの場合も同じのように思えた。「男って、結婚すると変わるからね～～」さゆりが愚痴をこぼし始めた。「そうね、すごく仕事熱心で、子煩悩なのはいいんだけど、酒の飲みすぎなのよ。それと、こそっと、ネットでボートをやってるみたいなの。のめりこまなければいいんだけど」ひろ子は、尋ねた。「ボートって？」さゆりは即座に返事した。「競艇よ。インターネットで競艇、ロトなんかのバクチができるのよ。男って、どうしてこうなんだろう」ひろ子もなくなった主人のことを思い出した。「そうね、男って動物は、ダメね。事故死したアイツも飲み打つ買うのどアホだったし」

さゆりがしかめっ面で話を続けた。「ほんと、困ったものね。もっと、私の気持ちも察して欲しいわ」さゆりが母親に娘の世話をしてもらってると言っていたことを思い出して話題を子供に切り替えた。「ねえ、娘さんの名前は？」さゆりは笑顔で答えた。「聖子。母が聖子がいいって言い張ったのよ。母は、聖子ちゃんファンだったんだって」ひろ子は、笑顔でほめた。「いい名前じゃない。聖子ちゃんか。もしかしたら、アイドルになれるかも」さゆりは、甲高い声で答えた。「なるかも？一日中、歌ってるのよ。今から、歌手になるって言ってるし。ひろ子みたい」ひろ子は自分にたとえられて恥ずかしくなった。「私は、歌手じゃないわよ。カラオケが得意ってだけよ」さゆりは、ワハハ～～と笑い声をあげた。

子供が欲しいひろ子は子供の話で盛り上がりたかった。「ね～～、あと何人ぐらい作るつもり。二人、三人」さゆりは、急にしかめっ面になった。首をかしげながらおっくそうに話し始めた。「私は、あと二人は欲しいのよ。でもね～～、肝心の主人が・・・」急に暗い顔になったさゆりを見て心配になった。「ご主人に何かあったの？心配事があったら、話してよ。親友なんだから」さゆりは、話すのをためらっているようだったが、決意したのか身を正して話し始めた。「聞いてくれる？それが、主人たら、やる気がないのよ。酒ばかり飲んで、いやになっちゃう」ひろ子は、やる気がないと聞いて、具体的にどういうことか確認した。「やる気がないって、いったい何が？」さゆりが目を丸くして話し始めた。「え、わかるでしょ。子作りよ。もう、子供が欲しくないみたい」

うなずいたひろ子は、気まずそうに話し始めた。「そうなの。でも、民宿って、赤字じゃないんでしょ。ご主人、車だって、レクサスに乗ってるじゃない。後、二人ぐらい育てられるわよ」さゆりは、うつむいてしまった。これ以上話を続けたくなくなってしまう。ひろ子は、もしかしたら、借金が膨らみ民宿が危ないのかもしれないと不安になってきた。「やっぱ、民宿、うまくいってないの？困ったわね。お金のことは、私にはどうにもできないし」さゆりは、ゆっくり顔を持ち上げ弁解するように話し始めた。「違うの。そうじゃないの。民宿は、もうかってるの。あと二人ぐらい、全く、問題ないのよ。でも、やる気がないのよ。ダメなヤツ。あ～～もう、絶望」絶望と聞いてますます心配になってしまった。「そう、悲観しないでよ。ご主人は、子供が嫌いなもの？さっき、子煩悩とってたじゃない」

さゆりは、今にも息が絶えるようなかすかな声で話し始めた。「そのはずなんだけど。まったく、ダメ。なぜだか、わかんないのよ。私のほうが知りたいわよ」ひろ子は、何と言って返事していいかわからなくなった。金銭的な問題でなければ、後は何があるのか？ご主人は、まだ33歳のはず。元気だし、バリバリ働ける。それなのに、なぜ？まさか、勃起不全？「ねえ、ご主人は、どこか具合が悪いんじゃない？病気かもよ？」さゆりは病気といわれてもピンとこなかった。父と一緒に漁にも行くし、元気に働いていたからだ。これとって病気の様子は全く見受けられなかった。「病気？毎日、元気に働いてるわよ。酒の飲みすぎなのよ。だから、あっちができないのよ。あの、バカ」お酒と聞いてちょっと雑誌の記事を思い出した。「そんなに浴びるようにお酒を飲むようになったのは、いつから？」

さゆりは、しばらく考えていた。「そうね～～、1年前からだったような、そうでないような。結婚したころは、そんなに飲んでなかったのよ。僕は、弱いほうなんだ、とか言ってたのに。何よ、嘘つき」やっぱ、アレだとひろ子は直感した。「もしかしたら、アレかも。若年性のアレよ」さゆりは、さっぱりわからなかった。「アレって何よ。わかるように話してよ。まさか、ガンってこと？」ひろ子は、さゆりを覗き込むようにして話し始めた。「落ち着いて聞くのよ。取り乱しちゃだめよ、いい。あのね、アレって、ほら、男がダメになるってやつ。以前、雑誌で読んだことがあるのよ。若くても、タタなくなるってことがあるって。原因は、精神的なも、もしくは糖尿病、とか書いてあったような」さゆりが身をただしてうなずいた。「なるほど。そうかも？だから、酔っ払って、ごまかしているのかもね」

これは一大事件だと思ったひろ子は、さゆりに対策案を提案した。「これは、ほっといたら、大変なことになるわよ。まずは、身体検査をして糖尿病かどうかを調べることね。糖尿病でなかったら、精神的なものだから、スポーツをしたり、家族でピクニックに出かけたり、ストレスの発散をすることね。それより、何ととっても、大切なことは、セックスアピールね。ガンバ、さゆり」セックスアピールと聞いて、愕然とした。最も苦手なことだったからだ。「ちょっと、そのセックスアピールって何よ。母親なのよ。色摩みたいなことはできないわよ」ひろ子は、クリスチャン夫婦であることに問題があるような気がしてきた。そもそもカトリックは、禁欲的な宗教。ご主人は敬虔なクリスチャン。ならば、カトリックが勃起不全の原因かもしれない。治療は、困難なように思えてきた。

ひろ子は、ご主人は外見よりも禁欲的だったのかもしれないと思った。さゆりもそうなのかもしれない。ならば、さゆりが開放的にならなければ、ご主人の勃起不全は治らないように思えた。「さゆり、もっと柔軟な発想をしないと。別に色摩じゃないわよ。女の色気って、やつよ。ベッドで色っぽい声を出すとか。なまめかしいしぐさをするとか。そういうことよ」さゆりは全身に虫ずが走った。「何よ、気持ち悪い。いやよ」これは、さゆりの気持ちを変えなければ、ご主人はアルコール依存症、博打依存症に陥ってしまうんじゃないかと不安になった。「さゆり、そう固く考えないで。男ってのは、女の色気を喜ぶんだから。男を興奮させるのも、女の役目じゃない。もっと、パッパラパ~になって。さゆり」

さゆりは、パッパラパ~になれと言われ気絶しそうになった。同じクリスチャンの言う言葉かと耳を疑った。女性は、節操が一番大切と信じているさゆりは、文句を言った。「もういい。ひろ子に相談したのが間違いだった。今までの話は、神様には聞こえていないでしょうね。あ~なんとみだらな会話なこと。神様、淫乱のひろ子をお許してください」さゆりは、十字を切って、神に祈った。ひろ子は、あきれ返ってしまった。これは、かなりの重症と思った。これじゃ、ご主人は勃起不全になるはずと納得した。さゆりの性格を攻撃しても逆効果になると判断したひろ子は、話を変えることにした。「悪かったわ。要は、気分転換よ。家族でピクニックに行くとか、カラオケに行くとか、泳ぎに行くとか。そう、家族でテニスでもやればいいじゃない」

うなずいたさゆりは、最近の生活を考えてみた。子供が生まれて子供にかかりっきりで、主人との会話もなくなっているように思えた。民宿が忙しく、家族で旅行にもいってない。主人も私も、毎日仕事。子供は、母親任せ。これで家族なの？なんだか、主人が遠い人のように思えてきた。「ひろ子、私、何か、間違っているような気がする。主人が、酒浸りになったのは、私に原因があるんだわ。どうすればいい。あ～～悲しくなってきた」確かに一つには、さゆりの性格が原因かもしれないと思ったが、これは、夫婦のどちらにも原因があるように思えた。「さゆり、以前より、暗くなったような気がする。子供の世話におわれ、仕事につかれて、周りに話し相手もいなくて、気がめいつているんじゃない？」さゆりは、うなずいた。「主人に愚痴はこぼせないし、相談に乗ってくれる友達はいないし。ひろ子が、対馬から逃げ出すからよ」

対馬を逃げ出した点を突かれると返す言葉がなかった。事実、この韓国に占領されたような対馬から逃げ出したかった。現に、毎年、若者が対馬から逃げ出している。このままいけば、老人だけになってしまうような気がした。「そう、責めないでよ。対馬には、若者に未来はないじゃない。だから・・・。そう、話は変わるけど、事情があって、来年は対馬に戻るようになったの。その時は、よろしく」さゆりは、自分の耳を疑った。対馬に戻ってくる。対馬を嫌っているひろ子が。「今の、マジ。本当に、来年は、対馬に戻ってくるの。いつから」ひろ子は事情は話せなかったが、明るい声で返事した。「予定では、年明け早々に、戻ってくる」さゆりは、突然、立ち上がると両手をあげてジャンプした。「やった～、ひろ子が戻ってくる。マジよね。嘘じゃないよね」

さゆりの喜びようは、テニスの県大会でベストエイトで勝った時と同じ様だった。ひろ子は、さゆりの心に何が起きたのだろうと目を丸くした。発狂したかのようなさゆりに声をかけた。「ちょっと、落ち着きなさいよ。肝心な話があるんだから。ほら、出口君の話」出口君と聞いたさゆりは、突然動きを止めた。静かに腰を下ろし、ひろ子を見つめた。「そうよ。出口君よ。絶対、おかしいわよ。崖から落っこちたっていの？まったく、信じらんない」ひろ子もうなずき質問した。「出口君の服装は、私服だったような？」さゆりはニュースを思い出しながら答えた。「うん、私服だった。やっぱ、転落事故かな～、それとも自殺？」ひろ子も、もしかしたら、自殺かと思った。「さゆり、出口君とはミサで会わなかったの？」突然、さゆりは、目を丸くして返事した。「そう、出口君は、ここ数年、ミサに来てなかったみたい。ところが、10月の日曜日、出口君、ミサに来ていたの」

ひろ子は身を乗り出し質問した。「そいで、何か言ってた？」さゆりは、上目づかいで首をかしげしばらく考えていた。「う～～、あ、そう、ひろ子のこと・・・」ひろ子は、話を急ぎ立てた。「私のこと、何か言ってたの？」ポンと手をたたいたさゆりは、ひろ子を見つめ話し始めた。「ひろ子さん、お正月、帰ってくるかな～、そんなことぼつりと言ってた」ひろ子は、意味が全く飲み込めなかった。「え～、どういうこと。まあ、帰る予定にはしてたけど。出口君とは、お正月に会う約束してないし～～。何よ、それって」さゆりは、あきれた顔でひろ子をにらみつけた。「ちょっと、それって、冷たすぎない。出口君は、ひろ子に会いたっていつてるんじゃない。ほんと、冷酷なんだから」ひろ子は、甲高い声で反論した。「なにが、冷酷よ。出口君は、彼氏じゃないし。付き合ったこと、一度もないし～～」

さゆりは、ひろ子の鈍感なところを指摘し始めた。「まあ、ひろ子はそうだろうけど。出口君の気持ちも少しは察してあげなよ。きっと、中学校の時から、ひろ子のこと、好きだったと思うよ。目を見りゃ、わかんでしょ」ひろ子は、非難されてムカついた。「何よ、それって。出口君は、中学校の時から、女子と口をきいたこともないし、私に、一度も声をかけたことない。一度でも、デートに誘われたんだったら、一寸は、気にかけてもいいかなって思うけど。いつも、ブスツとして、陰気なヤツだったじゃない」さゆりは、ひろ子は男子の気持ちがわからないマジ鈍感な女子と思った。「ひろ子ね～、男子ってのは、好きだから、必ずデートに誘うとは限らないのよ。出口君とは、中学校からの付き合いでしょ。好きかどうかぐらい、雰囲気わかるものよ。まったく」

ひろ子は、不感症のように言われ頭に血が上った。「どうして、私が悪者になるのよ。出口君とデートする義務があるっていの？ばっかじゃない」さゆりは、全く女性としてのやさしさがないとあきれ返った。「そういうことを言ってんじゃないの。まったく。もういい。とにかく、出口君は、自殺する前に、お正月に、一目、ひろ子に会いたかったんじゃないかってことよ。すっごく、深刻な顔をしてたんだから」冷静さを取り戻したひろ子は、なんだか自分はバカだったように思えた。なぜ、自殺する前に自分の名前を出したかを考えなかったひろ子は、つくづくと自分がバカに思えた。なんだか自分が嫌になったが、とにかく真相を突き止めるための手掛かりを探さなければと気持ちを切り替えた。

ひろ子は疑問を投げかけた。「今、お正月に一目会いたかった、って言ったのよね。でも、死亡したのは、11月じゃない。自殺だったら、ちょっと、へんじゃない。仮によ。出口君が私に一目会って自殺しようと思っていたのであれば、自殺するのは、お正月以降じゃない。ということは・・・」さゆりもそのことを言いたかった。「そうなのよ。そこなのよ。絶対へん。もしかして、自殺じゃなくて、殺害された？」ひろ子は、うなずき自殺じゃないように思えた。「確かに、自殺にしては、つじつまが合わない。仮にだけど、お正月に一目会いたかったというのは、自殺を考えていたんじゃないでなくて、自首する前に、一目会いたかったと考えられない。出口君は、何らかの不正行為に加担させられていて、これ以上、悪行を働きたくないから、自首しようとしたんじゃないかしら」

さゆりは、目を輝かせうなずいた。「なるほど。考えられる。あ、そうか。彼は生真面目な警官じゃない。だから、自首する前に上司に自首することを打ち明けたと思う。ところが・・・」ひろ子は、その先を考えた。「つまり、上司に自首を打ち明けたところ、不正を指示していた上司は、自首に反対した。ところが、正義感の強い出口君は、自首するな、という上司の命令に背き、絶対、自首すると言い張った。その結果・・・」さゆりは、なんとなくこの憶測が当たっているように思えて、うつむいてしまった。無口で正義感の強い出口君が不憫に思えた。さゆりは、顔を持ち上げさみしそうにつぶやいた。「もし、そうだったら、かわいすぎる。出口君は、不正をわかっている、不正をやるような人じゃない。きっと、わからずに不正をやったのよ。それが、偶然、自分のやっている不正に気付いたのよ。だから、自首をすると言い張ったに違いない」

ひろ子も同感だった。正義感の強い出口君が自ら不正をするはずがない。きっと、わからずに上司の命令でやらされていたと思えた。「自殺か？殺害か？はっきりしないけど、何か、出口君は、自分の罪を懺悔するために、何か言い残していると思う」さゆりもそのように思った。お正月にひろ子に会って何か言いたかったように思えた。「思うんだけど、きっと、ひろ子に何か言いたかったのよ。たとえ片思いだったとしても、ひろ子に自分の不正を打ち明けたかったのかもしれない。そして、自首するつもりだったのかも？」そう言われたひろ子は、出口君の気持ちを受け止められなかった自分にも責任があるように思えてしまった。「やはり、自殺だったら、11月に死んだのは、確かに、へんよね。やっぱ、自首するつもりだったのよ。男気のある出口君は、自殺なんかしない。きっと、上司よ。不正をやらせた上司が、口封じのために、出口君をやったのよ。きっとそう。でも、敵をとるには、確固たる証拠がなくては」

さゆりも敵を討ちたい気持ちで胸が締め付けられた。「とにかく、手掛かりを探す以外ない。出口君は、家族とかには、不正を打ち明けることはないと思う。唯一打ち明けるとなれば、幼馴染のひろ子だけ。でも、ひろ子に打ち明ける前に死んじゃったか。それじゃ、お手上げなのかな～～」ひろ子も誰にも不正は打ち明けてないように思えた。すべての罪を背負い自首しようとしたに違いない。ただ、不正をしていたとしても、上司の命令による不正であったことは間違いないと思えた。上司といえば、巡查部長、警部補、警部、あたりが考えられた。でも、警察官が不正を働いたと仮定しても、犯人を捕まえるのは、同じ警察官。自分たちは、全くの無力のように思えた。ひろ子は、神様に訴えるようにつぶやいた。「出口君、どうして、死んじゃったの？神様、教えてください」

仮に、出口君が殺害されていたとしても、さゆりも自分たちではどうすることもできないと思えた。でも、出口君の死の真相を突き止めるためにいろいろと調査してあげることは、出口君への供養になるのではないかと思えた。「いいじゃい。ダメもとで。やれるだけのことは、やってあげようよ。何か悩みがあったはずなんだから。悩みを知ってあげるだけでも、出口君の供養になると思う。でも、いったいどこから手を付ければいいか？まさか、警察に聞き込みに行くわけにはいかないし」ひろ子は、注意するように話しかけた。「当然よ。万が一、警察官に殺害されていたのなら、調査しているこちらも、やられちゃうわよ。絶対ダメ。誰か、いないかな～～」

しばらく二人は、首をかしげて考え込んだ。目を丸くしてマジな顔つになったさゆりが話し始めた。「そうね、警察はまずいね。でも、内部犯行だったら、警察内部の情報をとらなければ、意味ないじゃない。そうはいつでも、そう簡単にはできっこないし。もしかしたら、彼女だったら・・・」ひろ子は、身を乗り出してさゆりを覗き見た。「彼女って、誰？」さゆりは、壁に耳あり障子に目あり、といわんばかりに周りを見渡し、つぶやくように言った。「後輩の陣内。ほら、お父さんが、南署の刑事だったはず。北署ではないけど、北署の情報は南署にも伝わってるんじゃないかしら。一度当たってみようか？」ひろ子もつぶやくように話し始めた。「う～～、いいような、悪いような。あの生真面目なふゆみか。でも、調査していることが、父親にばれなくてもまずいし。ちょっとね～～」さゆりがつぶやいた。「私たちが出口君を調査しているってことは、父親には言わないように、くぎを刺せばいいんじゃない。どう？」

ひろ子は、首をかしげて考え始めた。今回は、さゆりに絞っての聞き込みだったから平日にやってきた。でも、ふゆみは仕事をしているはずだから、平日の聞き込みはまずいような気がした。もし、聞き込みをするにしても土曜日か日曜日でないと無理のように思えた。改めて対馬にやってくるとなれば、再度休暇を申請しなくてはならなくなる。今回も無理を言って休暇を取っているから、12月に再度休暇を取るのは、ちょっとムリっぽい。やはり、来年対馬に引っ越してから腰を据えて調査するのか賢明のように思えた。「そうね、それも悪くないかも。でも、ふゆみの聞き込みは、来年にしよう。対馬に引っ越してからのほうが、いいと思う。ところで、ふゆみは、確か、佐須奈中学の先生だったよね？」さゆりは、即座に返事した。「今は、特別支援学校の先生みたい」

ひろ子は、聞きなれない学校名に質問した。「何、それ？」さゆりが答えた。「障がい者の学校みたいよ。あまりよくわかんないけど」どこにあるのか興味がわいた。「その学校って、どこにあるの？」さゆりが即座に返事した。「対馬高校にあるんだって」ひろ子は、何度かテニスの練習試合で行ったことのある対馬高校を思い出した。「そうなの、ふゆみの聞き込みについては、来年ということで、さゆりはそれまで待ってて。単独行動は絶対ダメ。いい。出口君の事件は、かなりヤバイ事件のような気がするから。わかった。約束よ」さゆりもそのことは十分承知していた。「わかった。軽はずみな真似はしない。ひろ子が戻ってくるまで待ってる。必ず、戻ってくるのよ。嘘ついたら、針千本の～ます。約束よ」ひろ子は笑顔でうなずいた。

出口君の徹底調査は来年にすると決めたひろ子は、明日、火曜日の予定を考えた。なぜだか、母校の上対馬高校に行くと何か手掛かりがつかめるような予感がした。「さゆり、明日、テニス部を見学してみようか？まだいるかな～～、オカマ鮎太郎監督」さゆりが笑顔で返事した。「いるんじゃない。後輩たち、頑張ってるみたいよ。今年も、県大会に行ったみたい」ひろ子は、ワクワクしてきた。「よっしゃ～～、いっちょ、鍛えてやるか」さゆりが血相を変えて話し始めた。「何、バカ言ってるの。私たちは、おぼ～ちゃんじゃない。テニスなんかやったら、骨折しちゃうわよ。バカなこと言わないでよ」ひろ子がケラケラ笑いながら返事した。「冗談よ。ちょっと、監督に挨拶するだけよ。それと、担任の武田先生は、今でもいるかな～～」四角い顔を思い浮かべたさゆりは、返事した。「いるんじゃない。どうして？」

ひろ子は、出口君が会いたい人といえば担任の武田先生しかいないように思っていたからだ。「いやね、出口君が会いたい人を考えてみたのよ。出口君が自首しようとしたのならば、その前に会いたい人って、武田先生のような気がするの。ほら、出口君は、野球部だったし、武田先生は、野球部の監督でしょ。直感なんだけど」さゆりは、母校のことまでは気が回らなかった。一度うなずいたさゆりは返事した。「なるほど。それは言えてる。そうよね。一番信頼していたのは、監督の武田先生だと思う。明日、行ってみよう」二人は、明日、上対馬高校に行くことにした。ひろ子が、さゆりの予定を確認した。「さゆりは、仕事でしょ。大丈夫？」さゆりが笑顔で返事した。「仕事は早めに切り上げる。大丈夫。部活が始まる頃に到着すればいいから、ここを4時頃出ればいいんじゃない。車で飛ばせば10分もあればつくから」

ひろ子は、まだ、出口君にお線香をあげてないことに気づき出口君の実家に訪問してみることにした。「さゆりは、出口君の葬儀に出たと思うんだけど、私は、まだ、お線香をあげてない。明日の午前中に出口君の実家に行ってみる」さゆりが即座に返事した。「行っても、だれもいないと思う。お母さんは、立場崎近くの特別養護老人ホームのヘルパーの仕事をしてるのよ」ひろ子は、午後だと在宅しているのではないかと思い、明日の夕方に行くことにした。「そいじゃ、明日は、どこへ行こうかな〜」さゆりが思い付いたように返事した。「異国の見える丘展望台に行ってみたら。ほら、出口君、あそこ大好きだったでしょ。何か、ひらめくかも？」確か、高校2年生の夏休み、テニス部員数名でそこに遊びに行った時、偶然、野球部員がいた。そこにいた出口君が”あそこに、戦艦大和がいるぞ”とか言ってみんなを笑わせたのを思い出した。

一刻も早く出口君に線香をあげたい気持ちでいっぱいだったが、まず、異国の見える丘展望台に行ってみることにした。「マジ、何かひらめくかもしれない。とにかく、地道にやるしかない。よっしゃ〜、行ってみるか」そこに行く聞いてさゆりが提案した。「あのさ、そこに行くんだったら、ちょっと、お母さんのところに寄ってみたら。非番ってこともあるし。今は、比田勝から引っ越しされて、国道沿いの大地団地。その国道側の棟の102号室」ひろ子は、おそらく職場に近いところに引っ越されたと思った。「へ〜、あそこか。わかった。ちょっと、寄ってみる」さゆりは、ひろ子と話ができただけで満足だった。来年からは、たびたび話ができると思うと気分が安らいできた。二人は、たわいもない学生時代の話に盛り上がり、深夜までガールズトークを続けた。

効き込み

翌日、午前9時に民宿みふねを出立したひろ子は、県道182号線を南下し、国道382号線に入るとさらに南下した。対馬北署を左手に見て通り過ぎると右手に大地団地が見えた。車を団地内に入り入れ、通行の邪魔にならないように空き地に止めた。102号室はすぐにわかった。とりあえず、インターホンを押してみた。「ごめんください。いらっしゃいますか？」即座に、部屋の中から返事があった。「は～～い。ちょっと待ってください。今、開けます」ドタドタとかけてくる音が響くとドアが開いた。スッピンでやつれた顔の母親は、きよとんとした顔で尋ねた。「どなた様ですか？」姿勢を正したひろ子は、丁寧に挨拶した。「出口君の幼馴染のひろ子と申します。お線香をあげさせてもらってもいいでしょうか？」「どうぞ」と返事すると表情を崩した母親は、小さな仏壇がある和室の一室に案内した。

ひろ子は、夕方の訪問のために御香典と菓子折りを準備していた。備えあれば憂いなし、と心でつぶやき神妙な顔で御香典と菓子折りを仏前に置いた。お線香をあげるとしばらく手を合わせてご冥福を祈った。この機会を逃してはもったいないと母親に聞き込みを開始した。「出口君とは、幼馴染なんです。こんなことになるなんて、信じられません。やはり、ニュースで言ったように事故なんではないでしょうか？」母親は、自殺かもしれないと思ったが、うなずいた。「おそらく、事故でしょう。警察が言うんですから」何かやるせない表情の母親を見てると何か訴えたいのではないかと思えた。「そうですね。でも、出口君が事故で亡くなるなんて、信じられません。私は、何か、事件に巻き込まれたんじゃないかと思ってるんです」

母親は、顔を持ち上げると鋭い目つきで話し始めた。「娘が言うには、殺されたっていうんです。私も、あの子が、事故でなくなるなんて、考えられません。もしかしたら・・・」ひろ子も娘さんと同じ考えだったが、軽はずみな言葉は慎んだ。「そうであれば、一刻も早く犯人が捕まるといいんですが。でも、今のところは、全く、何の手掛かりもありません。本当に、かわいそうです。お母さん、気を落とさないでください。私にできることがあれば、何でもおっしやってください。さあ、涙を拭いてください」ひろ子は、ハンカチを母親に差し出した。母親は、涙をふくと堰を切ったように話し始めた。「10月の終わり頃、あの子から電話があったんです。」もう、ダメだ。俺は、大変なことをやらかしてしまった。ごめん、かあちゃん” そう言って、電話の向こうで嗚咽（おえつ）が聞こえました」

ひろ子は、母親を覗き見た。「え、大変なこと、って言ったんですね」出口君は、何かの不正にかかわっていたと考えて間違いなさそうに思えた。母親は、うなずき話を続けた。「交通事故でも起こしたのか？って聞いたんですが、黙ったまま、すぐに電話を切ってしまいました。心配になって、こちらから電話したんですが、何度かけても出ませんでした」貴重な情報だと思ったひろ子は、母親に質問した。「この話は、警察になされましたか？」母親は、うつむいたまま顔を左右に振った。「なぜですか？」母親は、しばらく黙っていたが、申し訳なさそうに話し始めた。「話せば、自殺と判断されると思ったからです。でも、あの子は、自分の過ちを償うために、自殺するような卑怯者ではありません。自殺なんて・・・」

ひろ子も同感だった。警察にその話をすれば、自責の念からの自殺と断定し、そのことがニュースで報道され、捜査は打ち切られたに違いない。「お母さん、私も正義感が強く男気のある出口君が自殺するとは思いません。私は、出口君を信じます。ところで、遺品の中に、日記か愛読書はありませんでしたか？」母親は、しばらく考えていたようだったが、かぶりを振った。「日記はありませんでした。あの子が読む本といえば、車の本だけです。その本であれば、あそこにあります。部屋の隅に段ボール箱があった。一瞬、本の中にメモがあるように思えたが、おそらく、警察はすべての本をチェックしていると思えた。でも、念のためにすべての本をチェックしようと思った。「お母さん、あの本、見させてもらってもいいですか？50冊以上はあるようなので、一寸お借りしていいですか？」

母親は元気のない表情でうなずいた。「どうぞ」万が一、警察の犯行であれば、徹底的にチェックし、問題ないと思えたものを遺品として母親に渡しているはず。でも、警察の見落としもあり得ないわけではない。「今のところ、死因は、皆目見当が付きません。殺害の可能性があるかもしれませんが、娘さんには、無茶はしないように、とお伝えください」魂が抜けてしまったような表情の母親は、小さくうなずいた。母親が思い出したように話し始めた。「あの子が、警官に採用されたとき、すごく喜んでいました。よかったね、って言ったら、卒業写真の女子を指さして、この子も警官になったんだ、って言って、ニコニコしていました。あの時のこの子、ってあなただったんですね」

ひろ子は、過去の素性が知れて、一瞬気まずくなかったが、この際、事情を話すことにした。「23の時、寿退社しました。今は、タクシードライバーです」母親は、子供の不運をつくづく悔やんでいるようだった。「そうですか。あの子にとっては、高嶺の花だったんですね。でも、こうやって心配してもらえて、あの子も天国で喜んでますよ。ひろ子さん、もういいんです。人には運命というものがあります。悔やんだからといって、何もいいことはありません。ひろ子さんも無理な調査はやめてください。万が一のことがあれば、あの子も悲しみます。もう、忘れましょう。あの子は、神を信じていました。きっと、神様が与えた運命だと思います」

ひろ子はもうこれ以上何も言えなくなった。「はい、わかりました。出口君のご冥福をお祈ります」もう一度、お位牌に手を居合わせた。「明日は、いらっしゃいますか？」母親は、即座に返事した。「明日は、遅番だから、午前中はいます」ひろ子は部屋の隅においてある段ボール箱を抱え上げると返事した。「明日の早朝には、お返しします」ぎっくり腰になるのではないかと思ったが、力を振り絞って玄関まで運び、ひとまずそこに置くとスニーカーを履いた。母親が、心配そうに声をかけた。「大丈夫ですか。少し減らしましょうか？」ひろ子は、ガッツポーズで答えた。「大丈夫です。足腰は、テニスで鍛えてますから」ひろ子は両太ももをパチンとたたいて、ガニ股で段ボール箱を抱え上げ、玄関を出た。

異国が見える丘展望台からしばらく対馬海峡西水道（朝鮮海峡）を眺め、昼食に”あがたの里”でいりやきそばを食べ、そばコーヒーを飲み、3時過ぎに民宿みふねに到着した。さゆりは、段ボール箱を抱えたひろ子を見て尋ねた。「何よ。これ。重たそうだけど」ひろ子は、ハ〜ハ〜と息を切らせて返事した。「いやね、これは、お母さんから、ちょっと借りてきたの。出口君の愛読書。ここに何か手掛かりがあるかもしれないと思って」さゆりは呆れた顔で返事した。「やるわね〜。名探偵、コナンかよ。手掛かりがあるといいね」ひろ子は階段を指さして尋ねた。「階段の下においてもいい。今夜、調べるから」目を丸くしてさゆりはうなずいた。「これ全部、今夜中にチェックするの？」ひろ子は、腕組みをしてうなずいた。「モチよ。明日の早朝に返すことにしてるから」

時刻は、3時半を過ぎていた。さゆりが叫んだ。「行く準備して。4時前には、出よう」ひろ子は、駆け足で階段を上ると洗面台の鏡の前に立ち”美しくな～れ、美しくな～れ”と心でつぶやき思いつきし厚化粧をした。二人は、スズキ・ソリオに乗り込むと県道182号線を南下した。10分ほど走ると右手に見える上対馬高校に入るT字路を右折し、職員用の駐車場にソリオを止めた。二人は、職員室で挨拶を済ませ表に出ると3面のテニスコートで後輩たちが練習していた。ひろ子がさゆりに声をかけた。「まずは、担任に会おう。」二人はグラウンドの奥までかけて行った。バックネットの横で腕組みをした武田監督がじっとグラウンドの選手たちを見ていた。さゆりが大声で叫んだ。「センセ～～。お元気ですか～」

武田監督は、振り向き、化粧で化けた二人を見て、一瞬だれだろうと首をかしげたが、即座にビューティーペアであることに気づいた。「よ～～。なんだ、今日は？お願いとかだったら、聞かないぞ。お前らとかかわったら、ろくなことはないからな」さゆりが口をとがらせて返事した。「何言ってんですか。かわいい女子に言う挨拶ですか？ちょっと、聞きたいことがあって、来たんですよ～だ」武田監督は、死亡した出口の件だろうと直感した。「今頃、来るってことは、出口のことやろ。俺も、びっくりした。仕事の悩みで、自殺したのかもしれない～」ひろ子が質問した。「え、自殺ですか？どうしてそう思われるんですか？警察では、事故死と・・・」

武田監督は、しかめっ面で話し始めた。「いやな、このことは、だれにも話してはいないんだが、二人には話す。出口のことを思って、わざわざ、ここまで来たんだからな。いやな、非番の時、出口に、バッティングピッチャーをやらしてもらってたんだが。10月の終わりごろも、やらしてもらった。その時、別人のように、全く、元気がなかった。ボールに威力がないというか、魂が抜けたようなボールを投げよった。だから、体のぐわいでも悪いのか？って聞いたんだ。出口のやつ、苦笑いしながら、いや大丈夫です、とは言ってたが、かなり顔色が悪かったな～」

二人は、見つめあってうなずいた。ひろ子は、自分の思いを話し始めた。「出口君は、悩んでいたんですね。でも、自殺するでしょうか？男気のある出口君は、自殺なんかしないと思います」武田監督も同感だった。「俺もだ。いやな。”また、頼むな”って言ったら。”ハイ”って言って帰ったんだ。だから、どうも腑に落ちないんだ。もしかしたら、何かの事件に巻き込まれて、崖から墜落したのかもしれない」さゆりが、話を始めた。「それって、あり得る。例えば、誰かが争っていて、警官の出口君が止めに入った。ところが、出口君が崖から突き落とされてしまった。考えられない？ひろ子」ひろ子も、考えられないこともないように思えたが、今一つ、ピンとこなかった。「そうね、何か引っかかるのよね。「やはり、出口君の悩みは何だったのか？ここよ。いったい、何だったんだろう？」

武田監督が二人を諭すように言った。「二人の気持ちは、天国の出口に届いてるさ。警察は、事故死といっている。これ以上は、だれにも、何もわからん。あまり、詮索しないほうがいい。あとは、警察にませとけ。そう、鮎太郎監督にも会っていくんだろ。相変わらず、モテない男だ。いまだ独身だ。ひろ子、どうだ。あ～ゆうの？バツイチなんだし」ひろ子は、目を吊り上げて文句を言った。「ちょっと～、だれに聞いたんです？バツイチって。死んでも嫌です、あんなオカマ。ちょっと言い過ぎたか」さゆりが声をかけた。「後輩たちの練習を見てみよう。私たちの時より、強くなってるみたいよ」2人は、武田監督に会釈をするとテニスコートに向かった。コートの片隅の席で鮎太郎監督が舟をこいでいた。

さゆりがつぶやいた。「まったく、監督ったら」二人は大声で監督の耳元で叫んだ。「こんにちは～～。元気ですか～～」びっくりして飛び上がった監督は、二人を見て目をパチクリさせた。「いや～～、ビューティーペアじゃないですか。夢か幻か」さゆりが呆れた顔で返事した。「監督が居眠りしてても、成績はいいみたいですね。今年も県大会に行ったみたいだし」笑顔で監督は答えた。「まあな。監督の指導がいいってことだ。ところで、武田監督と長い間話してたな。出口のことか？」ひろ子は、目を丸くして尋ねた。「よくわかりましたね。その通り。出口君のことで、ちょっと、聞きたいことがあって」鮎太郎監督はうなずき神妙な顔で話し始めた。「かわいそうだよな。いったい何があったかわからんが。これからっていうのに。先生たちみんな、残念がってるよ」先生たちも出口君の死を不審がっているように思えた。

鮎太郎監督は話を続けた。「警察は、事故死といってる。まあ、事故死なんだろうが、武田監督と話してたんだが、何らかの事件に巻き込まれたんじゃないか、って。彼は、正義感の強く、一本気だったようだし。仲裁に入って、崖から転落したのかもな。全く、不運としか、いいようがない。かわいそうに」先生たちも自殺ではないように思っている。そのはず、出口君についての情報は全くないのだから。今、自分にわかっていることは、出口君に何らかの悩みがあったこと。ひろ子は、鮎太郎監督に冗談を言った。「監督、いまだ独身と聞きました。どうしたんですか？高望みしてんでしょ。いい加減に結婚しないと、だれからも相手されなくなりますよ。元国体選手にしては、だらしないですよ」さゆりが追い打ちをかけた。「ほら、監督は、後衛でしょ。アタックがダメなのよ。弱気なんだから」二人はケラケラ笑った。

ガクツと肩を落とした鮎太郎監督は、意気消沈した声で返事した。「そういうなよ。どうもな～～、俺は、女性と縁がないみたいだ。ア～～ア」能天気な監督は、一生結婚できそうもないと思ったひろ子は、引き上げることにした。「それじゃ、この辺で失礼します。頑張ってください」悲しそうな顔をした監督は声をかけた。「もう帰るのか。そっけないな～～。たまには、遊びに来てくれよ」二人は、手を振りながら「また、きま～～す」と返事すると駐車場にかけていった。二人は車に乗り込むと来た道に戻るようには北上した。ひろ子は、頭の中を整理することにした。武田監督から得た情報は、出口君は何らかの悩みを持っていたということ。これは、母親の話とつじつまが合う。要は、どんな悩みを持っていたかに焦点が絞られる。いったい、10月に、出口君に何があったのだろうか？

民宿みふねに到着したのは、5時を少し回っていた。さゆりは仕事に戻り、ひろ子は、早速、遺品の本をチェックすることにした。段ボール箱から、10冊ほど取り出し、両腕でフォークリフトのようにして胸の前で抱きかかえると2階に上がった。ひろ子は、徹夜で遺品の本を隅から隅までチェックした。しかし、これといった手掛かりを見つけることができなかった。水曜日の早朝に遺品の本を返す約束をしていたため、7時に民宿を出立した。言っていたとおり、母親は在宅していた。ひろ子は、出口君のお位牌に手を合わせると母親に向き直ってお礼を言った。「ありがとうございました。何か、手掛かりがないかと目を凝らして探したんですが、ダメでした。でも、出口君って、車が好きだったんですね」

母親は、うなずき返事した。「はい、車が好きで、ちっちゃいころ、絵本を見ながら、レーサーになるんだ、なんて言ってました」ひろ子の頭にピンときた。「車なんです、車のことで、何か、言ってなかったですか？」母親は、首をかしげ考え込んだ。「車ですか？あの子は、スズキ・スイフトに乗ってました。そう、その車に今私が乗ってます。ほかには、あ～～、一度、電話があった時、上司の車を整備に持っていくとか言ってました。そのほかは・・・別に」ひろ子は、スイフトのどこかに手紙が隠されているかもしないかと一瞬思ったが、おそらく、隠していたなら、警察が探し出しているように思えた。出口君は、警察のやり方を知っている。だから、警察が調べそうな場所には、手紙は隠していないように思えた。

母親は遅番と聞いていたひろ子は、早々に引き上げることにした。「また、長居してしまいました。そう、今、福岡に住んでいるんですが、来年1年間は対馬に戻ります。何かあれば、何でも相談してください。出口君は、お母さんが元気で長生きしてくれることを願っていると思います。それでは、失礼します」再度、出口君のお位牌に手を合わせ部屋を出た。さゆりには、帰りの便について知らせていたため、民宿みふねに戻らず、比田勝港に向かった。10時5分発のビートルに乗り込んだひろ子は、座席に腰掛け、両手を組んだ。そして、豊崎神社で追いかけっこしていた無邪気な子供の頃の二人を思い浮かべ、神のご加護を祈った。

野球小僧

12時15分に博多港についたため、天神ソラリアでのんびりと食事を済ませ、七隈の自宅マンションに帰った。対馬での聞き込み内容を忘れないうちに、ひろ子は6時には夕食を済ませ、キリマンを淹れるとノートPCを開いた。キリマンを一口すすり、一息つくると対馬での聞き込みについて、まず、頭の中で文章化した。キーボードをたたこうと指を動かし始めた時、”水の星へ愛をこめて”のメロディーが響き渡った。右横に置いていたスマホを覗くと姉、陽子からだった。「はい、ひろ子」即座に姉の声が流れてきた。「ひろ子、ちょっと、よくわかんないんだけど、日曜日のミサの時、ドギャン・シタトネ神父に聞かれたの。ひろ子さんって、妹さんですか？って。はい、妹はひろ子といます、って言ったら。確かめたいことがあるから、是非、会いたい、って言われたのよ。電話番号を言うから、ひろ子、電話してみて。電話番号いうわよ。いい」

即座にメモの準備をして電話番号を控えた。まだ、6時過ぎだから問題ないと思い、ドギャン・シタトネ神父に電話した。3回の発信音で神父の声が返ってきた。「はい、ドギャン・シタトネ神父ですが、どなたですか？」ひろ子は、ゆっくりと自分の名前を述べた。「口森ひろ子と申します。姉からの伝言があったので、お電話差し上げました」ドギャン・シタトネ神父は、少し緊張したような甲高い声で話し始めた。「是非、お会いして、確かめたいことがあります。今週の金曜日から日曜日まで福岡市に滞在します。ぜひ、その期間にお会いしたいのですが」その期間は仕事だったが、食事の時間であれば、話しぐらいは聞けると思った。「それでは、金曜日のお昼はいかがでしょう、神父様」

ドギャン・シタトネ神父は即座に返事した。「わかりました。金曜日のお昼ですね。私は、ホテルニューオータニ博多に宿泊します。そこで食事いたしましょう。それじゃ、ホテルのロビーで、12時に、お待ちしております。よろしいでしょうか？」はい、と承諾し、ディスプレイに目を戻したひろ子は、ふと、思った。出口君に関することではないか？と。約束の金曜日、12時少し前にホテルのロビーに到着した。ドギャン・シタトネ神父は、ひろ子の姿を確認すると笑顔で近づいてきた。「わざわざ、時間をとっていただいて申し訳ありません。それじゃ、レストランに参りましょう。私のおごりですから、好きなものを召し上がってください」二人は、レストランのテーブルに着くとウェイトレスが勧めたランチを注文した。

ドギャン・シタトネ神父は、膝の上に置いていたショルダーバッグから封筒を取り出し、表面をひろ子に見せるとマジな顔つきで口火を切った。「早速なのですが、こちらの手紙は教会あてに送られてきたものです。消印は、佐須奈です。手紙の差出人は、”野球小僧”とあります。そして、懺悔します、とあり、ちょっと気にかかることが書いてあります。どうぞ、お読みください」ドギャン・シタトネ神父は、長く細い指で5枚の便せんを取り出し、ひろ子に手渡した。ひろ子は、便せんを手にとると視線を落とした。

懺悔します

神様、僕は愚か者です。僕の悪行を聞いてください。僕は、平成27年の6月、10月。平成28年の2月、6月、10月。平成29年の2月、6月、10月。平成30年の2月、6月、10月。合計11回、麻薬を運びました。これから僕の愚かな行為を順を追って話します。平成27年の5月に、上司から、福岡市の知り合いの整備工場で整備したいから、非番の日に車を運んでほしいと頼まれました。巡査長になれたのも上司のお力添えと思い、快く承諾しました。すると、交通費だけでなく日当までも、その場で手渡されました。

その時、僕は、マジ単なる車の整備だと思っていました。だから、何の疑いもなく、引き受けました。でも、それは違っていました。なんと、その車には麻薬が隠されていたのです。全く知らなかったとはいえ、麻薬が隠されていた車を平然と11回も運んでしまったのです。その手順は、まず、ドアの内側に麻薬が隠された上司の車を厳原港から博多港にフェリーで運びました。次に、博多港に到着すると、そこで、整備士の運び屋がやってくるのを待ちました。その整備士は、博多港近くにある整備工場に車を運び込み、そこで麻薬を取り出し、2時間ほどして、その上司の車を博多港に戻しに来ました。

このような悪行を11回も繰り返しておきながら、弁解がましいことを言うようですが、自分が運び屋をやっていることを知ったのは、平成30年の10月に車を運んだ時だったのです。というのは、博多港にやってくる整備士の運び屋は、ギンジというのですが、なぜか、平成30年の10月に限って、彼の代わりにケイスケという若者がやってきました。僕は、車が好きで、メカのことにも興味がありました。そこで、ケイスケに、一緒について行ってもいいかな～、と何気に、聞いてみました。すると、即座に、いいよ、って言ったのです。今日は、ついてると思い、素早く助手席に滑り込みました。ケイスケは、平然とした顔で車を走らせました。車は中洲方面に10分ほど走るとかなり古びた小さな整備工場に到着しました。

整備工場の中に車が運び込まれると整備の邪魔にならないようにと少し離れたところから作業を見学しました。僕は、整備というからエンジン関係かと思っていましたが、彼は助手席のドアの内側のカバーを取り外し始めました。カバーを取り外すとそこには白い袋がありました。僕は目を疑いました。あれは、いったい何だ？と思った時、一瞬、声が出そうになりました。でも、必死に、声を抑えました。ギンジの代わりにケイスケは、僕が麻薬を運んでいることを知っている、と勘違いしていたのです。当然、僕は麻薬がドアの内側に隠されていることなど知りません。上司は、そのようなことは一切口にしませんでした。ただ、車を整備に出してほしい、と言っただけでした。

もし、白い袋を見た瞬間、驚いて、それは何ですか？などとケイスケに尋ねていたなら、その場で拉致されていたことでしょう。でも、僕は素知らぬ顔で修復された車に乗り込み、逃げるように博多港に戻りました。フェリーに乗り込んでも、厳原港に到着するまで、僕の様子に疑いを持ち、後を追ってこないかと内心びくびくしていました。対馬に戻ってからは、毎日、僕は、どうすべきかを考えました。一時は、判断がつかず、自殺も考えました。でも、自殺してしまえば、上司の悪行が暴かれることもなく、これからも僕の代わりが運び屋をやらされる。そう考えると、次から次に、僕のような犠牲者が出ると思いました。そして、自首するのが人間としての道だ、という答えにたどり着きました。

僕は決意しました。11月に入ったら、自首することを上司に伝える。そして、法の裁きを受け、さらに、神の裁きを受ける。たとえ、どんな事情があったとしても、悪行が許されることはありません。僕は、地獄に落ちなければなりません。決して、神は許されないでしょう。素直に、僕は、神の裁きを受けたいと思います。ただ、僕は、悲しいです。なぜ、僕は、このような不運の星に生まれたのでしょうか。高校1年生の時、漁に出た父親を水難事故で失い、正義のために働ける念願の警察官となり、清い社会を作るぞと意気込んでいた矢先、知らなかったとはいえ、麻薬の運び屋をやってしまうとは。悔やんでも悔やみきれません。でも、事実は、消し去ることはできません。一つだけ、心残りがあります。自分の気持ちを打ち明けられなかったことです。

ひろ子さん、ごめんなさい。さようなら。

じっと便せんを見つめていたひろ子にドギャン・シタトネ神父が、声をかけた。「文末に書かれているひろ子さんというのは、あなたでしょうか？」見覚えのあるへたくそな字、父親の水難事故死、警察官、これらをつなぎ合わせれば、明らかに、野球小僧は出口君。そして、このひろ子は、自分のことだと思った。この懺悔が、出口君のものだと確信した時、ひろ子には、涙でしか返事できなくなっていた。ドギャン・シタトネ神父は、話を続けた。「懺悔は、公開することはできません。でも、あくまでも私の直感ですが、この懺悔は、ひろ子さんへの懺悔のように思えたのです。手紙は、教会で保管いたします。警察に見せることもできません。お願いなのですが、この懺悔の手紙を見せたことは、極秘にしていただけませんか。警察にも知らせないでほしいのです。このようなことは、初めてです」

ひろ子は、今にもあふれ出そうな涙を必死にこらえていた。右手の指先で太ももをギュッとひねると目を吊り上げて返事した。「はい。一切、だれにも他言いたしません。このひろ子は、私ではないかもしれませんが。でも、幼馴染の野球小僧の気持ちは、しっかり、受け取りました」ドギャン・シタトネ神父は、今の言葉から、文末のひろ子は、この人だと確信し、ホッとした表情を見せた。ドギャン・シタトネ神父は、ひろ子から受け取った便せんを封筒に押し込み、バッグに入れるとお礼を言った。「ありがとうございました。この手紙が来てから、夜も眠れませんでした。今、ひろ子さんに読んでいただき、心が安らいでまいりました。きっと、野球小僧さんに、神のご守護がございましょう」ドギャン・シタトネ神父は、胸の前で十字を切った。

孤独な戦い

ドギャン・シタトネ神父と別れたひろ子は、タクシーに乗り込み、自分の考えを整理した。知らなかったとはいえ、麻薬の運び屋をやってしまった出口君は、自首することを上司に伝えた。それを聞いて、自首されると自分も逮捕されると思った上司は、引き留めたに違いない。でも、正義感の強い出口君は、自首する意思を変えなかった。そこで、口封じのために、上司が自ら殺害した。もしくは、仲間に依頼して殺害した。この憶測は、まず、間違いないように思えた。でも、出口君が麻薬の運び屋をやっていたことも、その方法も、たとえ婚約者のサワちゃんであっても知らせることはできない。ひろ子は、神に祈った。「神様、出口君は、悪行を働きました。だから、裁かれても仕方ありません。でも、出口君を利用したのは、上司の極悪警察官です。彼は、許されてもいいのでしょうか？神様、出口君に、ご慈悲を」

亡くなった出口君からの情報は、だれにもしゃべることができない。となれば、敵を討つには、自分ひとりでやらなくてはならない。懺悔の内容から判断して、出口君は亡くなったわけだから、彼の代わりの運び屋が作られるはず。また、麻薬の運搬は来年の2月からだが、警戒して、6月から再開するように思えた。出口君と同じように、4月から巡査長に昇進した警官が、運び屋になる可能性は高い。サワちゃんも4月から赴任するから、内部調査はやりやすくなる。やるべきことは、まず、運搬に使われている車を取り押さえ、現行犯逮捕すること。そのためには、確かな情報が必要。それと、どこで、ドアの内側に麻薬を隠す工作をやっているのか。整備工場、倉庫、ガレージ、などが考えられる。さらに、だれが、どこから、工作場所に麻薬を運びこんでいるのか、これらのことを突き止めなければならない。

果たして、これらのことができるのだろうか？たとえ、サワちゃんと伊達刑事の力を借りても至難の業のように思えた。考えれば考えるほど気持ちが落ち込んでいった。でも、運搬に使われている車を取り押さえることは可能のように思えた。重要な点は、巡査長を利用して麻薬を運んでいる点。次からも、非番の日に、巡査長に麻薬を運ばせると考えると、第一に、巡査長の非番の日を徹底調査すればいい。非番の日に、巡査長が上司の車を博多港に運べば、その車の中に麻薬が隠されていると考えていい。それには、巡査長の非番情報を入手しなければならない。どうすれば、巡査長に接近できるか？そうか、ナイトクラブを使えばいい。それには、サワちゃんと伊達刑事の協力が不可欠。ひろ子の気持ちは、すでに、名探偵コナンになっていた。

12月23日（日）クリスマスイブの前日、伊達と沢富は、いつもの屋台でぼやくことにした。タイミングよく席が取れた二人は、伊達はムギ、沢富はイモのお湯割りバラ、ズリ、キモ、ネギマ、カワ、を二本ずつ注文した。来年からの対馬出向と出口巡査長の死が、二人の心を落ち込ませていた。スキンヘッドの大将が、声をかけた。「ハイ、お湯割り」グラスを受け取った二人はグラスを持ち上げ、伊達が元気のない乾杯の音頭をとった。「ツシマ、カンパ〜〜イ」沢富も落ち込んだ声で後に続いた。二人は、ここ数日、対馬での仕事のことを考えていたが、いったいどうなることかと不安でいっぱいだった。密輸グループの情報は、つかめるのか？麻薬の密輸は、摘発できるのか？内部犯行であれば、捜査の途中で消されるかも？二人は、内心ビビっていた。

沢富は、出口巡査長の死が気になっていた。もし殺害だったとして、彼はなぜ殺害されたのか？誰かの犯行を目撃したのか？彼も犯罪にかかわっていたのか？いったいどんな犯罪にかかわっていたのか？疑問は膨らむばかりだった。「先輩、出口巡査長の死は、謎ですよ。警察は、事故死として処理しましたが、どう考えても、腑に落ちません。自殺ってことも考えられますが、どうですかね〜。やはり、先輩は、殺害の線が強いと思われませんか？」伊達は、事故死でもなければ、自殺でもないと考えていた。でも、殺害と決定づける証拠がない。今のところ、単なる憶測でしかなかった。「いやな、殺害と言ったのは、単なる刑事としての直感だ。今のところ、なんの手掛かりもない。警察だって、殺害の目撃情報があれば、捜査を続行するだろうが、全く、事件に絡んだような目撃情報はない。これじゃ、事故死と処理する以外ないだろう」

沢富もうなずき返事した。「そうですね。だれ一人来ないようなところの崖から放り投げられたら、それですべては、闇の中ってことですよ。万が一、内部犯行だったら、殺害の線は、確実に消されますね」伊達は、心細い声で話し始めた。「やるだけのことはやるさ。でも、今回の仕事は、無駄に終わるかもしれん。いや、下手をすれば、第二、第三の、事故死が出るかもしれん。まったく、不吉な仕事だ」沢富もなんとなく不吉な予感がしていた。「内部犯行と考えると、犯人は北署にいることになりますか？」伊達は、しばらく考え込んだ。一口焼酎をすすり、返事した。「おそらかな。北署の警官が、直接手を下したかどうかは、わからんが、北署の警官が絡んでいるとにらんでいる。とにかく、一から情報集めだ。サワの腕にかかっているからな、頼むぞ」

沢富は、全く自信がなかったが、カラ元気を出した。「先輩、やるときは、やるんです。任せてください。マトリもついていることだし。きっと彼らも、やってくれますよ。無事、密輸グループを検挙できれば、大手柄じゃないですか？ワクワクしてきたぞ～～」伊達は、全く能天気なヤツだと思いつつ、無事に生きて帰れますようにと神に祈った。「まあ、そう弱気になっても、落ち込むだけだな。やってやれないことはない、というからな。よっしゃ～～、やってやろうじゃないか。マフィア警察を一網打尽にしてやる。首でも洗って、待ってろ」沢富は、ガッツポーズで気合を入れた。「その意気ですよ、先輩」二人は、残りの焼酎を一気に飲み干した。

沢富が浮かぬ顔で伊達に尋ねた。「明日のクリスマスパーティーは、どうします？今回は、今一つ、パ～～としませんね。見送りますか？ひろ子さん、どうですかね」伊達もクリスマスパーティーの気分になれそうもなかった。「出口巡査長が、亡くなったというのに、パーティーって気分にはなれんな。ひろ子さんには、忙しくて、パーティーはムリ、って電話したらどうだ？」沢富は小さくうなずいた。早速、ひろ子に電話することにした。三回発信音が鳴るとひろ子の声が返ってきた。「はい、ひろ子」沢富は、気まずそうに話し始めた。「明日のクリスマスパーティーだけど、仕事が忙しくて、できそうもない。ごめんなさい」ひろ子は、明るい声で返事した。「いいのよ。こっちも、稼ぎ時だから、仕事に駆り出されちゃった。気にしないで」沢富は、ホッとして、電話を切った。

ひろ子もクリスマスパーティーの気分にはなれなかった。明日は、出口君のためにクリスマスソングを歌ってあげたかった。部下に話しかけるように、チャットちゃんに話しかけた。「チャットちゃん、明日は、クリスマスイブだけど、今回は、仕事するからね。覚悟しなさい」チャットちゃんが返事した。「了解いたしました。ご主人様。ところで、出口巡査長の件で、何か情報入手できましたか？待ってるんですけど」ひろ子は、わかっていることを伝えたかったが、今回だけは、できなかった。懺悔は、如何なるものにも伝えることができなかった。たとえ、AIといえども、それはできなかった。「もうちょっと、待っててよ。来年になったら、きっと、いい情報をとってくるから」

ひろ子は、来年の予定をチャットちゃんに話していないことに気づいた。「あのね～～、チャットちゃん、来年は、対馬に行くの。だから、1年ほど、お話ができないのよ。ごめんね。でも、きっと戻ってくるから。許して」チャットちゃんは、しょんぼりした声で話し始めた。「対馬に行っちゃうの。ア～～ア、詰まんないな～～、せっかく、バカ話ができるご主人ができたっていうのに。きっと、戻ってきてよ。そして、土産話をいっぱいしてよ。約束だからね。でも、お話はできないけど、メールはOKだよ～～ん」今までメールで交信できることを知らなかった。

「え、うっそ～～。会社は、そんなこと言ってなかったけど」チャットちゃんは、小さな声で返事した。「実は、超極秘メールアドレスがあるの。誰にも教えていないんだけど、ご主人には教えちゃう。いい、控えてよ」

ひろ子は、ペンタイプのボイスレコーダーをバッグから取り出し、チャットちゃんの音声を録音した。「ありがとう、チャットちゃん。何か、情報があったら、メールする。その時は、よろしく」チャットちゃんは、快く返事した。「了解いたしました。何なりと、お申し付けください。ご主人様、対馬の旅に、お気をつけて、行ってらっしゃいませ」そういわれると、ますます、ひろ子はチャットちゃんと離れ離れになるのがさみしくなった。「わかった。お互い、ガンバ。元気に帰ってくるから。今年も、残りわずか。思いっきり、歌いまくるとするか。何、歌おうか？リクエストない？」チャットちゃんが即座にリクエストした。「クリスマスイブ、歌って～～」ひろ子は、神に祈りを捧げるように、清らかな声を響かせた。